

4-1 前置詞+関係代名詞 (1)

——なぜ前置詞が必要なのか？ 使用上の注意点

1 「前置詞+関係代名詞」構文の落とし穴

「前置詞+関係代名詞」、すなわち in which や with which といった、関係代名詞の前に前置詞がおかれる構文は、英文を読む際だけでなく、書く際にも必要な重要項目です。

ところが、「どういうときに前置詞が必要なのか？」「構造がわかりにくい」、また「書く際にいつ前置詞が必要なのかの基準が判断できない」という類の声をよく耳にします。

「前置詞+関係代名詞」の構文でつまずく落とし穴の1つは、「前置詞+関係代名詞」の場合、前置詞そのものの訳語が日本語に出ない場合が多いことがあげられるでしょう。

2 日本語に出ないことが多い前置詞の訳語

まず、次の文を見てください。

- 「君と話したいことがあるんだ」

There is something \wedge I would like to talk with you. (×)

この文のどこがおかしいのかおわかりでしょうか？

日本語の上では、「君と話したい」(I would like to talk with you) + 「こと」(something) をつなげて

something (which) I would like to talk with you

のようにしても問題がないように思えます。しかし、which (省略可)の後続には名詞欠落文がこなければなりません、この場合は which 以下の I would like to talk with you にはどこにも空席はありません。

実は先行詞の something と I would like to talk with you をつなぐには、前置詞 about を用いて次のように表現しなければなりません。

- There is something (which) I would like to talk with you **about**. (○)

または、

- There is something **about which** I would like to talk with you. (○)
なぜ about という前置詞が必要となるのでしょうか？ それは、この表現のベースとなる元の2つの文を考えてみればわかります。

- ① There is something +
- ② I would like to talk with you **about** something
「あること (something) について (about) 君と話がしたい」

3 前置詞そのものの訳語が消えてしまう？

ところが something を先行詞として関係詞を用いて2文をつなぐと、この「～について」に相当する前置詞 about は (日本語の上では) 訳語から消えてしまいます。ただし訳語が消えても、それは日本語の問題であって前置詞が必要なくなるわけではないのです。次も同様です。

- He met her at the party **to which** he was invited last week.

「彼は先週招待されたパーティで彼女と知り合った」

日本語の上では、「彼が招待されたパーティ」となりますが、2文に分解してみると「彼はパーティに招待される」のように、「に」にあたる前置詞 to が必要であることがわかります。

- ① He met her at the party.
- ② He was invited **to** the party last week.

ここまで見てきますと、「前置詞+関係代名詞」の前置詞は訳出されないと思われがちですが、それは in や to といった、いわば“軽い”前置詞の場合です。次の例ではどうでしょうか。

- Communication, be it by the Internet, radio, or print media, is a crucial freedom without which democracy cannot exist.

* be ... A or B ... がAであれBであれ (譲歩) crucial 重大な

「インターネットであれラジオであれ活字であれ、通信は、それがなければ、民主主義が存在できない重大な自由である ⇒ 民主主義が存在するのに不可欠の重大な自由である」

のように、without (～がなければ) といった“重い”前置詞の場合は訳語に現れざるを得なくなります。

4 前置詞が必要かどうかの判断基準は？

このように、「前置詞+関係代名詞」の問題点は、日本語訳において前置詞の訳語が現れない場合が多いことに原因があることはおわかりいただけたと思います。では前置詞が必要かどうかの見極めはどこで行えばいいのでしょうか？

ここで今さらなのですが、あまりにも当然すぎるため、意識されることのない原則を再確認しておきます

《 先行詞となる名詞 》

関係詞を含む文を元の2文に分解した場合、先行詞となる名詞は2つの文にそれぞれ登場し、それぞれの文で“文の要素”となる。

簡単な例で確認してみます。

- This is a book \wedge I have long wanted to read \bullet .

「これは私が長い間読みたいと思っていた本だ」

この文の先行詞はa bookですが、2文に分解した場合、a bookという名詞（先行詞）は次のような働きをしています。

- ① This is a book. \Leftrightarrow isの補語
 S V C

- ② I have long wanted to read the book. \Leftrightarrow readの目的語
 S V O

すなわち、先行詞となる名詞は、①においては「補語」、②においては「目的語」という一人二役を演じているわけです。つまり先行詞となる名詞は元となる2つの文のそれぞれにおいて、“文の要素”となっていなければならないのです。

ここで“文の要素”とは何かも一応確認しておきます。

《 文の要素=名詞の文中におけるポジション 》

- ① 動詞の主語 ② (他動詞・前置詞の) 目的語 ③ 補語

このうち目的語という場合、上に示したように他動詞だけでなく前置詞の目的語も含むことに注意してください。では、ここまでの確認です。次の日本語に対する英訳は正しいでしょうか？

- 「我々は彼がその問題を容易に解いたことに驚いた」

\Leftrightarrow 「問題を解いた容易さに驚いた」と考える

We were surprised at the ease which he solved the problem. (?)

ここでの先行詞はease（容易さ）という抽象名詞です。2文に分解した場合、このeaseという名詞はそれぞれの文において文の要素になっているはずですが、本当にそうになっているか試してみましょう

- ① We were surprised at the ease. 「我々はその容易さに驚いた」

名詞easeは文の要素（前置詞atの目的語）になっています。ところがもう1つの文ではどうでしょう。

- ② He solved the problem. + the ease (???)
 S V O

このままでは名詞easeは文の要素になりえません（浮いてしまっています）。どうすればいいでしょう？ あいにく動詞solveの主語も目的語も埋まってしまっています。したがって前置詞が必要になります。問題はどの前置詞を用いるかということになりますが、結論から言えば、ここではeaseが「容易さ」という「抽象名詞」であることから、withを用いて「with+抽象名詞」で副詞に相当する表現にします。

- \rightarrow ② He solved the problem with ease. 「彼は容易に問題を解いた」

このeaseを関係代名詞whichに変え、with whichとして①と結んだ

We were surprised at the ease **with which** he solved the problem. が正しい文となります。

まとめ

- 「前置詞+関係代名詞」は日本語に訳した場合、前置詞自体の訳が出ないことが多いので注意する
- 先行詞となる名詞は、元の文のそれぞれにおいて文の要素となる（一人二役）